

昭和四十四年七月二十五日 第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第二四四号）

慈光

第二十一卷

第九号

聖人の面影……………近角常観……………(1)

次 関東に於ける 聖人を憶う……………柳瀬留治……………(5)

① 63.7.27 私 が 涙 の 種……………藤本広恵……………(8)

目 仏心と凡心の道交……………花田正夫……………(17)

ともしび……………聚墨生……………(23)

聖人の面影

近角常観

聖人の御面影はいかがしましたであろう、平素いただいているところを描きたてまつりて見よう。聖人の真面目をもつともよくあらわした御言葉は、

「外に賢善精進（けんぜんしようじん）の相を現ずることを得ず、内に虚仮（こけ）を懐けばなり」

の一語に尽きてあると思う。私は常にこの一語を誦するときは髣髴（ほうふつ）として聖人の御姿があらわるるうに感ずる。実にこの一語は聖人の信仰を尽くしたるのみならず、その信仰のままが聖人の御行状の上に躍如（やくじよ）としてあらわれたる有様が、歴々として見るが如くである。したがって真宗の真面目が生き／＼としてあらわれてある言葉である。

今さらこと新らしくのべたてる必要もなければ、順序として解説をこころみねばならぬ。これ即ち善導大師の『散善義』の至誠心（しじしようしん）の釈にして、通常の読

み方としては

「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ」

というのである。敬虔なる善導大師の信念として、内外不相応の至誠にあらざることをいましめられたる教訓として、誠にさもあるべきことである。真実の信心を得たる人は、外に偽善を現じて、内に虚偽を懐くことはあるべきはずでない。故に、善導大師の真意をただけば、この通常の読み方で、敬虔なる真実信心の真面目をあらわされた言葉である。

しかるにもし真実の信仰に人らざる者が、このお言葉を律法的に固執して、外に賢善精進の相を現ずるが如く、内も一点虚仮を懐いてならぬという意味とすれば、我等はたちまちつまづかねばならぬ。何となれば、我等は常に内心虚仮不実ばかりではないか、内に虚仮を懐くことを得ざれ

というても、とても出来ぬ。

ここにたちまち一転して、全体、外に賢善精進の相を現じて立派なことの出来るような殊勝の相を現しているのが大間違いである。ここにおいて、文点を変更して、外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなりと喝破（かつぱ）せられたのである。実に持戒持律（じかいいじりつ）の律法主義を一語で根底から砕かれたる信仰である。この語は余程聖人の繰りかえされたものと見えて『教行信証』『愚禿鈔』は勿論、『唯信鈔文意』にも出てい

る。『和讃』にも

外儀（げぎ）のすがたはひとことに

賢善精進現せしむ、

貪瞋邪偽（とんしんじやぎ）おおきゆえ

奸詐（かんざ）ももはし身にみり。

とある。『歎異鈔』にも、
「当時は後世者（ごせしや）ぶりして、よからんものばかり念仏もうすようにおもい、あるいは道場へはりぶみをして、なんなんのことしたらんものは道場へ入るべからずなどということ、ひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか」

とある。又『御伝鈔』の平太郎御教化の中にも

「垂迹（すいじやく）において内懐虚仮（ないえこけ）

の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀をあらわすべからず。唯本地の誓約にまかすべし、あなかしこ云々神威を軽しむるにあらず、ゆめゆめ冥贖（めいじく）をめぐらしたまうべからず。」

とある。全体文点を附け換えて意味をあらわすことは、聖人ばかりではない。当時の解釈法にありたることで、必ずしも聖人独特の方法と云うでなければ、この文点の転換によりて闡明（せんめい）せられたる、一点虚飾を許さざる聖人の生き／＼したる信仰の流露せるにいたりては、古今に超絶して聖人御一人と仰がねばならぬ。

これと同意味の聖人の御歌がある。即ち蓮如上人『御一代聞書』におつたえなされてある。

世の中に尼の心を捨てよかし

女牛（めうし）の角はさもあらばあれ

「さればかたちはいらぬことなり」と、蓮如上人が附け加えられた。『改邪鈔』にも、

「都鄙（とひ）に流布して遁世者と号するは多分一遍房他阿弥陀仏等の門人をいうか。かのともがらは、むねと後世者気色（きそく）をさきとし、仏法者とみえて、威儀をひとすがたあらわさんとさだめふるまうか。わが大聖人の御意は、かれにうしろあわせなり。常の御持言には、われはこれ賀古の教信沙弥（ききようしんじやみ）

の定(じよう)なりと云々。しかれば絆(こと)を専修念仏停廢の時の左遷の勅宣によせましまして、御位署には愚禿の字をのせらる。これすなわち僧にあらず、俗にあらざる儀を表して、教信沙弥のごとくなるべしと云々。これによりてたとい牛盗人とはいわるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者とみゆるように振舞うべからずとおおせあり。この条、かの裳無衣(もなしごろも)、黒袈裟をまなぶともがらの意巧に雲泥懸隔(うんでいけんかく)のものをや。」

とあるは、聖人滅後、原始時代の遺弟の目にうつりたる聖人の面影をしのびたてまつることが出来る。たとい他人より牛盗人と云われても、仏法者と云われることを嫌いたまい、教信沙弥の如く日雇人になりても、特に念仏者らしき風を現すことをいやに思いたまい、我こそは所謂、愚痴無智の輩なり、破戒無戒の徒なり。実に五劫思惟の御苦勞も、この愚禿のためなり、親鸞一人がためなりと、何のつくろいもなく、何の飾りもなく、如来のしろしめすままに打ち出したまいたのが聖人の真面目である。

しかるに今日ややもすればこの聖人の真面目を誤りて見るものがある。教信沙弥の定なりと仰せられたるを、貧生活に安んぜらるることと思ふたり、愚禿と仰せられたるを聖人がことさらに謙遜して、かく卑下されたることと考え

のである。加うるに『愚禿鈔』の内外対(ないげたい)には、内愚外賢とともに、左の如く繰りかえしてある。

- 内は外道にして外は仏教なり。
- 内は聖道にして外は浄土なり。
- 内は疑情にして外は信心なり。
- 内は悪性にして外は善性なり。
- 内は邪にして外は正なり、内は虚にして外は実なり。
- 内は非にして外は是なり、内は偽にして外は真なり。
- 内は愚にして外は賢なり、内は仮にして外は真なり。
- 内は退にして外は進なり、内は疎にして外は親なり。
- 内は遠にして外は近なり、内は迂にして外は直なり。
- 内は違にして外は随なり、内は逆にして外は順なり。
- 内は軽にして外は重なり、内は浅にして外は深なり。
- 内は苦にして外は楽なり、内は毒にして外は藥なり。
- 内は怯弱(こじやく)にして外は強剛なり。
- 内は懈怠にして外は勇猛なり。
- 内は間断にして外は無間なり。
- 内は自力にして外は他力なり。

これ聖人御自身ならびに当時に対する悲歎述懐にてまします。しかして聖人が最後の御言葉とも見るべきは『和讃』奥書、八十八歳の御筆である。その絶筆に
よしあしの文字をもしらぬひとはみな、

牛盗人とは云われるとも、仏法者、御世者と見せぬようにと、自らくらまして隠されたことと考えて、かえって殊勝氣に振舞うなどの教訓が、これを真似して、かえって殊勝氣に振舞う弊(へい)におちいり、甚だしきにいたりては偽善におちいるおそれがある。これ聖人の真精神をいただかずして、矢張り威儀を表せぬという一種殊勝な威儀を表することになる。これというのも、如来の御慈悲の前に飾りなく打出されたる真味をいただかずして、頭の下りたる態度ばかりを真似るからである。

かく偽善におちいり、殊勝氣に流るることを嫌うのあまり、他の極端にはしり、いたずらに赤裸々に醜さを暴露して、聒(てん)として顧みざるが如き弊害におちいることがある。これはまた聖人が、愚禿悲歎述懐として骨身に徹するお悔悔をないがしろにするものである。聖人が徹頭徹尾、頭を下げて、一点自己の価値を認めたまわぬ、みずから空しいしたまうおこころを仰がねばならぬ。聖人が『愚禿鈔』に

賢者の信を聞きて、愚禿が心を頭わす。
賢者の信は、内は賢にして、外は愚なり。
愚禿が心は、内は愚にして、外は賢なり。
と仰せられた。実に愚禿が心は、内愚外賢の名利の奴(やつこ)、虚名虚榮の塊(かたまり)なりと懺悔したまう

まことのこころなりけるを、

善惡の字しりがおほ

おおそらごとのかたちなり。

是非しらず、邪正もわかぬ、この身なり、

小慈小悲もなければ、

名利に人師をこのむなり。

これ九十年お教化の最後の御遺訓かと思えば、我等は云うべき言葉はない。実に我等は善惡の字知り顔の大虚言者であります。小慈小悲ももたずに、信仰を売る名利の人師であります。南無阿弥陀仏、々々々々々々。

蓮如上人の和歌

一念のうちにさだまる往生を となえてのちとおもうは
かなさ 文明四年二月
法をきくみちにこころのさだまれば 南無阿弥陀仏とと
なえこそすれ 文明九年十二月
ふる年も、くるる月日の今日までも なにかは祖師の恩
ならぬ身や 文明十年
いくたびかさだめしことのかわるらんたのむまじきはこ
ころなりけり 明応五年八月
あすみんとおもうこころはさくら花、よるはあらしのふ
かぬものかな

関東に於ける親鸞聖人を憶う

柳 瀬 留 治

ふと店頭の新聞書、石田瑞麿氏の「親鸞」を求め来て読んでいるところだ。先ずその付録に石田氏と作家の遠藤周作氏との対談があり、遠藤氏は、仏教のむつかしい術語に抵抗を感じる、やさしく砕いてはとの言に對し、石田氏は、熱意を持ってぶつかっていく場合、そうした術語も抵抗にならぬが、知らぬ人を近づけようとする場合は噛み砕く、といっている。

で私の思うに、平易に噛み砕くと理解されるだろうが、単に理解になるまで、信仰というこくのあるものになり難いと思うんです。理解は己の持合せの知識や経験で消化することで常識に終わり、超世不可思議な本願は真剣にぶつかる熱でないと体験出来ないと思うんです。説明は実物其物でない為です。

近角先生は、念仏は砂糖の塊である。甘さはいくら説明しても届けられない。ただその一片を口にするのみだと申

された。又仏とは火である、火をおつ付けられれば誰しも熱いと声を立てる。仏とはそれである、とよく仰言った。又久しくアメリカで禅を説かれた鈴木大拙老師も、彼等に砕いていうと、持ち合せのキリスト教の知識で理解し、禅の味でなくキリスト教的になると言われた。キリスト教は一般に判りよく、我々のもつ動物的の愛を神への道とするが、愛は憎の反面で共に欲念です。

日本の知識人は初めはキリスト教により宗教というものを知るようです。石田氏も、大体の人は凡そキリストに近い感じで親鸞を受取っているらしいと言われる。遠藤氏は、洗礼を受けた正宗白鳥はキリスト教はシンディイ教だと書いているとか。それは最後の審判の日まで悔い改め、祈り続けよという一事である。猶遠藤氏は歎異鈔の言う所は、「許してくれる」の意味に解しているという。そして風は曾ての倉田百三の「出家とその弟子」により一般に普

及された受取方だと石田氏が言っている。

常観先生は、その「許してくれる」の思想に對し、いくら許してくれても、こんなに浅ましく汚い心のままである。悪くてもよい浅ましくいまままでよいでは安心出来ない。それでそのためにかく悩んでいる者にただこの念仏なのだと言るのであった。

又遠藤氏は念仏を唱えるということは「お母さんごめんなさい」ということだと言われる。それに対して石田氏はただ「お母さん」と呼ぶだけだといっている。

言われて見ると、私の念仏も、自分自身の仕様なさに困って洩れ出る念仏で、矢張「お母さん」のようである。己の仕様のなさに洩れ出る声で、キリスト的祈りではなく母を頼る声のようです。祈りはこの方からの願望で、一方的な注文であり、我々は仏の「我を頼めよ」とのお心が有難くて仏を呼ぶのです。

近角先生も仰言った。救いとは念仏とは、お母さんの手につかまることではない。お前は危いから母はお前の手を掴(つか)んで放さないぞと、母の方が放さないのである。子供の方から母の手を握っていても突然の場合は放してしまふ。撰取不捨とは逃げる者を奪いとると訓(よ)む、握った以上放さないのである、と仰言った。それで我々は助かっているのです。母を思うのは遇々(たまたま)

勝手な時だけで、直ぐ忘れ、有難くも何ともない。そして時、心が空虚になり暗くなり不安になる。それで念仏が出る。念仏の中に母の温い手に握られている実感があるので

す。私共は母を離れて、独り歩きが出来る気である。それが危なかくして見てもらえず、握って放し給わぬのです。その母が一人(おわ)すために、我々は母を忘れて生活に夢中にもなっているのです。

今、石田氏の「親鸞」を読み、聖人が越後の遠流(おんる)より、常陸に來られて築波山の裏の山間の村々を往き來して、人々に他力念仏を説かれるお心に感泣している処です。遇々一昨秋私と妻は、築地本願寺の勝友会のお誘いで、常陸の御旧蹟を訪ね、まのあたり聖人御化導のさまを偲び、今もまぎろ心に浮かんでくるのです。

先ず枚敷山麓の大覚寺に一泊し、聖人を襲わんとした弁円(べんねん)が、尊容に接して後悔の涙に咽んで弟子となったこと、更に高田の専修寺に至り、聖人がここに念仏の草庵を開かれて、真仏坊や頭智坊など秀れた弟子により、かく今高荘な伽藍をなし念仏の盛んになったことを思い、又稲田の西念寺に詣でて、聖人がここに開宗の本典、教行信証の稿を草されたことに感を深くしたことです。

聖人は何の縁故を求めてこんな辺地に来られたものだろう。こんな辺鄙な地で彼の多くの経論を引用した教行信証を書くに当り、資料を如何にして得られただろう、など思いを廻らしていたことです。しかし辺鄙とはいへ、鎌倉に国の中心たる幕府があり、文化の絶縁という程にもなかつたであろう。又余り幕府に近いと煩わしいので頃合の距離かとも見られる。それでさえ、聖人帰落後、聖人の長子慈心房（善鸞）其他いかかわしい念仏の弟子が争いを起こし幕府の不信を招き、鎌倉へ呼出しを被り、高弟連名の「交名張」を携（たずさ）えて真仏房や性信房が鎌倉に上り弁明し、治（おさ）まったことも幾度かあった。

さて、教行信証の御起草は稲田の草庵だという一方、京都だという説もある。石田氏は帰落後書かれたと言っている。私の親しい寺田弥吉氏は稲田の草庵は正しいとされている。その証として、本典（ほんでん）の化身土（けしんど）巻の中頃にある文「三時教を按ずれば、如来涅槃の時代をかんがうるに、週の第五の主穆王五十一年任申にあたり。その任申よりわが元仁元年申にいたるまで二千一百八十三歳なり。また賢劫経（けんごうきょう）仁王経涅槃経等の説によるに、すでに末法にいらりて六百八十三歳なり」と既に末法の時ぞと書かれてある。又西念寺の古文書にも、この禅坊で五十二歳の時書かれたことが挙げて

ある。聖人みずから元仁元年と書かれている上は、本典の終巻の化身土の巻の其の年書き続けていられたことが思われることです。帰落後という説は本典の浄書本の出来たそれではなからうか。

稲田で書かれた坂東本を聖人が帰途、箱根で性信房と別れる時、念仏真宗の本旨として関東に伝えよと、彼に賜ったということを常観先生が仰言ったことを覚えておられる。

去る八月一日、聖人の草鞋姿で越された箱根、その箱根神社の親鸞堂跡に聖人の銅像が建立され、御像の前で、然も雷雨中に法要が営まれ、我々日大同窓が小松雄道博士を初め榎本、大塚、中村、吉田の諸君等十四五名の僧俗が傘をさし乍ら読経したことです。

像は彼の西本願寺所蔵の「鏡の御影（かがみのごえい）」に見る如き逞しい体軀の立像です。聖人は体軀も建康もがっちりして強く、然も強い意志とねばりを以て野山を跋涉して化導された佛を湛えたものようです。四十二歳の時、風の熱で四日間臥された事が恵信尼公（えしんにこう）の消息に見られる他、九十歳の人寂まで病まれることもなく、化導の折々に多くの著書を書き残して下されたこと、それによって我々が今日かく念仏が聞かれ、かく救われたのです。そのがっちりした体軀を打ち仰ぎ、唯々尊く忝く、力強く思う次第です。

私が涙の種

近角先生が私に、今度お慈悲に気付かせて頂いたことを一通り書いてみよと仰せられました。が、私はどうしてどうしてそんなことの書けるような者ではありません、これは遠慮しましょうと、一時は思いましたが、よくよく考えてみれば、一通り心のうちを書いて、それを読んで下さって、信仰の話に耳を傾けて下さる方が、一人でもできる様なことになれば、それこそ私にとってはこの上もない喜びと存じまして、むしろ勇んで書かせて頂くことにいたしました。

私は今（大正三年）から六年前に、非常な熱心をもって信仰を求めまして、毎日曜は勿論、その他の日も学舎に参りまして聴聞させて頂きました。ところが一向わかりません、もっとも理屈の上ではよくわかりませけれど、心になか／＼会得ができず、信ずることもできず、有り難くもなるともないのです。そうしたことで熱心さも薄らぎ、雨の

藤本広恵

日や忙しい時はおっくうになりました。それでも何か悲しいとか不愉快なことが起っていると、また一寸学舎へ、何かやすめになる拾い物でもないかと顔出しをするという有様になり、おしまいには、暇があると浅草の映画館へ行き、学舎へは足が重くなってしまいました。

そのように、いくら聞いても／＼得心できず、したがって熱心の度がさめて参りました。その当時の私の、求めた心持を、大略はじめに書きましょう。

その頃私はただひとりの愛児を死なせました。それが悲しくて／＼一緒について行きたい位でした。その時、信仰でも得たら悲しみがなくなるかと思つて聞きはじめたのであります。今から思えば、実に勿体ないことで、信仰でも得たらという考えは、なんとひどい心持ではありませんか。また私は実に恐ろしい病氣を持って居ります。それは子供の時分からで、普通の病氣ではありません、はげしい潔

癖症であります。私自身では、こう潔癖がひどくては、人様の中へ出ることもできぬ様になる、是非早く治さねばと色々努力しましたが、一年々々とひどくなってきたのです。しかもそのことを人様に気付かれまいと、苦勞も大変でした。そこで信心の道にでも入ったらすこしは治るだろうと思つて求めたのであります。実に恐ろしい心持ではありませんか、自分の欲望満足のために仏様を利用したのです。

また私は、あらたまつた席や、目上の人の前に出ると、席おめするといふのか、人おめするといふのか、顔色が變つて、汗がひどく、はげしい動悸がして、声が震うのであります。しばらくすると少しなおり、再びひどくなり、そして又少しおさまり、かように四五回もひどくおめるのです。このことが私は苦になりまして、治したくて／＼なりません。そこで信仰でこれを治そうと横着な心を起したのであります。

また私は、常に一寸した事まで一々手帳に書きつけて苦しむのです。足の爪を切ることとか、天井裏の蜘蛛の巣を取ることとか、……隣の人に出会いながら礼を云うのを忘れたこととか、すべて目にふれるあらゆることが私の頭の中へ一つ一つの用事になつてあらわれ、四十も五十もなつてくるのであります。その五十からの事を一つも忘れぬ

心で信仰を／＼と求めておりました。信仰を道具にして、仏様にさからつて居りました。そんな心でいて、どうしてお慈悲に気付かれましよう、百年たつても安心の出来ようはずがないので、私はその苦しいなりで日を送つて居りました。

ところが昨年、暑中休暇の時、「親しい友人が、六七年振りを訪ねてくれました。私は喜んで迎えました。その友人は、意外にも私をひどく罵りました。

「君は以前、人の出来ない様な苦學をして実に感心な人だ、未頼もしい青年だと、僕は深く尊敬していた。君が朝な夕な配達してくれる牛乳をおし頂いて飲んだ。雪の夜明けに君の配達車の音で僕は幾度夜具を蹴つて起こして貰つたか知れない。汗に瘦せた夏の日の君の姿に、僕は風寝を全くやめてしまった。僕は君を信頼すべき親友と思つていた。

しかるに君の今日の有様、アア僕は君を買いかぶつて居つた。一日勉強するでなし、何一つ研究せず、ただお役に役所に務め、ひまさえあれば眠る。全く君は心身共に活動が止つてしまった。それで君は世に生きて居ると思つてるか、読むべき書物が買えないのか、それともいろはも忘れたのか、活気がないにも程がある。多年の苦

様にと、その数を一々繰り返してみまして、若し一つでもその数が足りない時は、サア大変です。物も云わずに氣違ひの様に考えこむのです。それで手帳に一々書きつけてしまえばいくらか頭が休まるので、それをあとで片付けるとそれだけ手帳を消すのであります。さてその消し方がむっかしいので、消したのちに、さてそれがうまく片付けたかどうかを考え、それがわからないと考えこむのであります。それですから一つ用事が済めば、それを十文字で消しその事を次に調べた時、消してある所へ第二の十文字を書き、又次に調べた時第三の十文字と何回も／＼消して、数十回続けてしまいに全く黒く消されるのであります。こんなことで心の休まる時もなく実に苦しいのです。これを信仰で治そうとして求めました。

また私は、元來僧侶でありまして、常に説教をせねばならぬのであります、ところが下手で／＼実に困るのです。眞の信仰の道に入れば上手になれるだろうとの心持もありました。又朝夕の勤行が、面倒で／＼しようがなかったのであります、ただ習慣的にやらねば気が済まぬので続けていきましたが、忙しい時には仏壇がなければよいと思ひました。そこで信心を得ると、うれしく楽しく出来るだろうと考へたのであります。

要するに私は、今思えば身の毛のよだつほどおそろしい

勞で疲れはてたのか、早や老衰したか。殴つても目が醒めまい。意気地なし、ぐず。寝惚け。君の如きを友達に数えるのはけがらわしい。これだけの言葉を形見として絶交する」

と云うのです。私はもう堪えられませんが、思わず拳を握つてその友人を殴ろうとしたので、それを見て友人は笑つて行きました。

私は机にもたれて泣きました。ただ悔しくて／＼家内にも話しました。しかしこれは全く私を覚醒させようとの言葉と気が付きました。サアそうなることとして居られませんが、オノレ發展せずにはおくれべきかと、深く決心いたしました。その時、家内が申しますのは

「左程ぐずでもないのに因循（いんじゆん）と思われ、かなり快調なのに不活発と人様に思われるのは、第一あなたの潔癖がためであります。そのために活動が出来ず、世間から別者にあつかわれ、生きているのか死んでいるのかとまで言われるのもキツとそのためです。その潔癖を治して下さらぬと、今にももう人が相手にしてくれぬ様になります。山奥で人を相手にせず居られるのなら、いくら潔癖でもかまいません。それは出来ぬことです。私、私のいのちにかけての願ひ、半分だけでもなおして下さい……」

と涙を流して私を拝んだのであります。成程、潔癖は一年一年とひどくなって、今はその極点に達しております。毎日々々洋服や帽子を濡れ手拭でふかすにはいられません。書物から煙草入れ、すべて自分のものはこらず拭いて、拭いて破れるまで続け、その後はもう家内にもいじらせません。いじらせる時には必ず手を洗わせます、洗うた手では障子をしめず、足か何かでしめさせます……実に万事に ついて潔癖のひどいことは到底人様にお伝えすることはできません。ただ家内一人に万事をのみこませて、神様仏様を扱うように世話をさせました。しかしあまりひどくなつて、そろ／＼人様にも知れ出したのです。家内は私の潔癖を苦にして自殺しかけたことが数回もありました。今またしきりに泣いて私を先程から拜んでいますし、友人のきびしい覚醒をうながす言葉、私は決心せずには居られませんが、とう／＼家内と共に一夜を泣き明かした上いよいよ私は決心しました。子供の頃から三十余年、焦げついたように離れない潔癖を断然その時なおす心になったのです。家内も非常に喜びましたが、その翌日から余り私の変りがひどいものですから、家内は手持ち無沙汰になってかえって心配しました。私は又癖をおさえた、その苦しきは一通りでなく書くことも出来ません、なおしてかえって苦しめて／＼世の中までいやになりました。そうした中で

いるの目的でなしに、ただ恐ろしくて信仰を求めるようになってきた。

私の勤めている役所の主任の武田師が見舞うて下さることに「自宅では心が散るが病院では、一切の用事を遠ざけて病は医師にまかせて安心して静養しなさい」と親切に云って下さり、医師も「そう神経を亢奮させては、いろいろの手当も無駄になる」と叱るように言うて下さる。毎夜睡眠薬を飲んで一睡も出来ず、神経はいらだつばかりでいよ／＼淋しくなった。明日第二回の手術ときまったら晩に、又武田師が来て下さったので、私は未来が恐ろしいと訴えますと、篤信な師は

「ソレそこである。いろ／＼つとめても神経は静まらん薬でも眠れない、病気はよくなるらん、行く先は淋しい。いかにあせっても何にもならぬ、全く仕様のない者、それをやるせなく思召す広大の御慈悲である……」

といろいろ歎異鈔を引いてお聞かせ下さり、一度近角先生に来て頂くよう頼んでやろうとのことでした。そのお蔭で翌日は安心して二回目の手術を無事にすませました。けれど今度の手術は身体にこたえまして、熱が出まして十二月十三、四日の晩は危篤の電報を出そうかとさえ思わせるほどでした。信仰の篤い井口医師や塚原様には一方ならぬ御心配をおかけしておりましたが、私が熱のた

役所から帰ると遠方まで友人を訪ね、試験のために書物を借りたり、いろいろ方法を相談しました。またアメリカに行つて勉強したいと思つて早稲田の先生を訪ねたり、会話を研究したり、アメリカの友人に問い合わせたりして、毎夜十時すぎまで歩き廻り、帰ると借りた本が山積する中で、法律や会話の本を読んで何回も徹夜しました。

きたないと思つても癖は出せず、テク／＼歩くので足は痛み、身体は疲れますが、夜は寝られません。一番苦しいのは潔癖が出せないことでした。とうとうはげしい神経衰弱にかかりました。そのうち足の痛みがひどくなり、左足が動かなくなり、夜は四十度の熱も出ます。診断の結果、筋炎とのこと、大手術を無事に済ませましたが、神経衰弱がひどくなり、役所のこと、読書のこと、留守宅のことなど心配でなりません。郷里の母や、名古屋の兄に知らせると心配かけるので、それがまた心配になり、夜になると傷が痛み出し、臀部、更に背中まで痛むようになり、これでは発展どころではなく、これきり死ぬかも知れない。死んだら家内はどうするだろう、家内より自分はどうなるであろう、サアそうなると思えることは一切役に立たず、身体もため、手術経過もよくない、二回目の手術をして貰うことになった。いよ／＼これはもう駄目だ、今度は、行く先が恐ろしくなってきた。もうこうなると以前のようないろ

めうわ言で、近角先生／＼と、先生をお呼び申して居ったそうであります。

十五日に、塚原様が近角常音先生をお伴して来て下さいました。午後二時すぎから七時八時まで長い間塚原様と代りあうで色々とお話をして下さいるのに、少しもわかりません。時刻はだん／＼過ぎ、熱がそろ／＼高くなつてきますので、私はじれったくてたまらなくなりました。すると塚原様が「君はまだ余裕がある、今夜聞けなくても明日聞こうとしている」と云われた。たしかに私はその考えがありました。ところが塚原様はさらに「近角常観先生が今日来て下さる予定だったが、越前からの求道者がわざ／＼上京せられてお話の最中ゆえ、代りに常音先生が来て下さったのである。先生にも一度は来て頂いてやるし、我々も明日再び来る。けれども幾度聴いても、また先生から聴いても、信心の道にはそう奇抜な変わった話はあるものではない。つまり同じお慈悲の話を、繰返し／＼手をかえ品をかえお話させて貰うだけだ」と云うて私の心の余裕を破ってくだりました。

そこで私は、明日という望みも、変わった話という望みも駄目になったのであります。そこで今晚安心させて貰わねばならぬといよ／＼あせって参りました。常音先生もいよいよ真剣にお話をして下さるようになりましたが、私は十

分にわかりませんと申しますと、先生は、

「そう神経ははずまらず、病気ははかばかしくない。お慈悲の話は一向わからん。それであなたは一体どうしますか」

と切りつめてのお尋ねでありました。私はそれを聞いてます／＼淋しく、悲しくなってきました。こんなに聴いても分らん、実際もう仕様がな、泣くばかりでした。これだけお聞きしながら何時までもわからんとは申し上げにくく思いましたが、うそも言えず、モ一仕方がありませんから思いきってその通りこたえました

「どうするって、お尋ねですが、私は聴いてもわからずどうすることも出来ません。モ一泣くばかりです」

と申して号泣しました。すると先生は

「そうでしょう」

と簡単なお答えでした。私は、これほどに苦しんで、それでもわからず、泣き出したら「そうでしょう」と、たった一言の御挨拶、泣くなら勝手に泣くがよい、とのいかに無慈悲なお言葉のように、一時は思いました。次に

「何でも出来るように思っているが、実際は何一つもできず、つとめて病を治そうとしても治らず、信心を得たい／＼といくら力んでも少しも得られず、実に我々はみな、あなたも私も、泣くより外に仕方のない者である」

と先生が仰言いました。

私はびっくりしました。泣くなら勝手に泣けとお積りで「そうでしょう」と、御自身方はチャーンと信心頂いておいでになって、お前は到底頂けぬ、もう駄目だ、泣くばかりだろうと、私一人をお見捨てになった、無情のお言葉と申していたのに、私一人でなく、我々はみな泣くより外に仕方がないのだとは、常音先生も、私の仲間になって下さったのか、道理でなんだか「そうでしょう」のお言葉が簡単ではあるが、非常に重みのある、力のこもったお声であったが、深い意味があったのである。お前もそうだろう、私もそうである、との意味のために異様な力がこもっていたのである。

さてそうなるとすこし変に思われる。しかも信心得たいと力んでも、あなたも得られん、私も得られんとお言葉は、いよ／＼もって変だ。私は早速問いかえました。

「泣くより外ないとは先生もですか」

「その通り」

「信心が得られぬとは先生もですか。先生は信心を得て喜んでおいでになるでしょう」

「信じたいと力んで、それで得られるような我々では決してない。それが出来るような立派な者なら如来のお慈悲はいらぬ。何一つもさらに出来ぬが我々で、そこで如

来がやるせなく思召すのだ」

とのお返事。私は以前にはい／＼の目的のために信仰でもと思うたが、実に間違っていた。しかし今では、いろいろの計画は駄目、病氣も医師や薬で思うにまかせず、死期が近づいたと思うて、ただ信仰が得たい／＼との一点張りになったのに、その信仰を得たい／＼の一点張りが信仰など得ることが出来るものかと、頭からおしつぶされたので、私は思わず

「ハハア、一点張りに信仰を求めても駄目なのですかと申しました。すると塚原様が

「信じたいと力んでいるなら自力になる。それが出来るなら、他の修行も出来、成仏も出来る。我々は、もう信ずることも、何も出来ぬ、どうして信ずる様なことが出来るものか」

と。先生と共に、信じたい／＼の私の考えをさんざんにこわされました。六年前から、もっとも初めはい／＼の目的のため信じたいと思うたのですが、とも角も長い間信じたい／＼の一点張り、今の今まで信じたい／＼で一杯の私の頭を、信するなんか出来るものか、の一言でひどくぶちこわされました。

私は今回、今分らずともまた明日という心の余裕を先ず第一に破られ、更に、信じたい／＼でみちている頭をすっ

かり壊されて、手のつけようもなくがっかりしました。先生はしすかに

「実は我々は、信じたいと力んでも得られず、愚痴がこぼれる、神経は静まらん、全く手のつききったもの、そこを不憫と思召して下される広大な慈悲、その慈悲にたすけられて、大悲のふところ住いの身になりながら歎異鈔の九章のお示し通り、天におどり、地におどるはどに喜ぶべきことをよるこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもいたまうべきなり……まことによく／＼煩惱の興盛に候にこそ。アア腹も立つ、愚痴もこぼれる、申しわけのない我々」

と。私はすぐさま

「先生も、またお兄上様も、腹を立てたり、愚痴をこぼしたりなさるのですか」

「もちろんそうです！」

とのお答えでした。え、そうですか、それではもう私は到底信じられんもの、神経の静められんもの、私は愚痴のやまんもの、こう考えてくると私は、いよ／＼乗り気になつてきました。先生はまた

「かかる者を涙の種として下さる親様の御親切」

と続けて下さいました。ところが今の今、泣いて／＼、涙ばかり流して居りました私は、このお言葉の涙の種とい

うところがひっかかった様に気にとまりまして、放蕩息子は親の涙の種、片輪者は親の涙の種、ハハ一涙の種とは、誰が誰の涙の種だろうか？早速私は、

「誰が涙の種ですか」

「あなたが、如来様の涙の種です」

「へエ、私がお泣かせしたのでですか」

「そうです、あなたがこうゆう病気にかかることも、神経が亢奮して静められんことも、何もかも昔から知り抜かれて、可哀想である／＼と、大昔からひき続いて、今もなおあなたのために泣いていて下さるのです」

「へエ、泣いて下さる。それでは私というものが無いなら泣いて下さらなかつたのですか、この私が涙の種で」

「親鸞一人がためなりけり。あなた一人が涙の種です」

その時、私はただ何となしに済まん、と頭が下りました。この片輪者、この放蕩者、この私めが涙の種かと知れたとき身ぶるいがしました。その瞬間、妙な心持がしました。乳呑児が、乳を求めて母の膝へ力なくして這い寄りうとして、片手を膝にかけた様に、如来様のお膝に片手をかけたなら、温い涙が手の上へ一としずく、アア深いお慈悲と頭をあげると、大きな如来様の御目が涙で一杯になっているという様な心持がして、思わず私は嬉しと声をあげて泣きました、その時塚原様も喜んで下さいましたが、常音

ぱります。しかし他人の話し声が邪魔になり、肩がこって苦しくてなりません。

また先生と塚原様に来て頂きました。私は

「一度あれだけ喜んで、あとでそれを忘れていたとは、仏様をなぶりものになっているようではありませんか」と申しますと、先生は

「あれだけ喜んだというの、仏様が喜ばせて下さったのだ。そしてあとで忘れている煩惱の興盛なことも、仏かねてしろしめして、そこが涙の種だと思召すお慈悲である。四国の信者の人が、よくこんたり、愚痴をこぼしてみたり、よくよく仕様のない者のための本願がいよいよたのもしく思われる」と書いて来たよ……」

と御親切に聞かせて下さいました。お蔭でいよ／＼私は盲人が片目だけあいたようでありましたのが、ここで両眼が全くあいたような心持がしまして、ありがたく思いました。家内もまた信仰に驚きを立てて聞いてくれるようになりました。

その後退院して早速学舎にお参りして、常観先生にお目にかかり

「私はお慈悲を喜んで、あとで忘れていたことは、丁度親が子供に菓子を見せて一時喜ばせ安心させておいて、あとで舌出し横みて知らぬ顔をしているのと同様です」

先生が全く仏様の様に思われて知らずに拝んでいました、ここところはもう書けませんでした、ア、ア、ア。

その晩ははじめて身体がらくになり朝まで知らずに眠り熱も昇らなかつたそうです。私の信じたいという頑固な頭を、信ずるなんか出来るものかと、先ず一言で壊してしまい、自力の根性を砕いて下さって、自分は駄目な者と知らせて下さって、お慈悲に気付かせて下さいました。いかに親切で適切なお導きは、人間わざとは思えません。たしかに仏様のお使いと嬉しく思うております。今となつてはもう信ぜずには居られません。成る程、私から信ずるのではなかつた、仏様のお慈悲から信ぜずに居られぬ様にして下さつたのであります。

それから病気の調子もよく、熱もあがらず、神経は静まり、潔癖の苦しいのも感じなくなりました。お医者の方も不思議だと思っておられました。

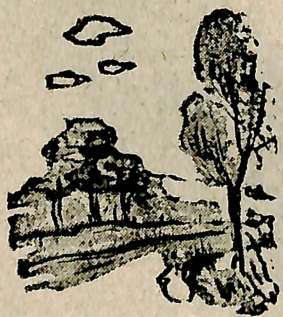
ところがまた、心配がおこつてきました。十五日の晩あんなに嬉しかったことが、とんと喜ばなくなりました。サア心配でたまりません。家内など室外に出さして、独りで瞑目して嬉しかった時のことを思い出そうとしましたが、一向に駄目です。一生懸命になりますとすこしづつ嬉しさが出てきます。子供が爪の綱をひっぱるように真剣にひっ

と申しましたら、先生は

「その譬は間違っている。子供が親から菓子を貰って、一時は非常に喜んで、そのあと、すぐまた横着ないたずらをするのは、親ははじめから知っている。その横着な子供が、その不孝な子供が、その片輪の子供が、親はひとしお可哀ではないか」

と、両眼ひらいた目の曇りをとって下さつたのであります。それから日曜毎に学舎へ参りまして、一枚つつ薄皮をとって頂くように喜んでおります。

大正三年一月二十四日 いたずらもの 広恵



仏心と凡心の道交

花田 正夫

仏心とは、清淨真実な仏の智慧であり、大慈大悲心である。凡心とは、われら凡夫の虚仮不実な、貪瞋・煩惱の心である。さてこの二つの心は相對立してあるのではなくしてこの仏心のまことが、われらのわるき心に働いて下さってタドンの真黒い炭に火が移って、全体が真赤な火となり、火のまんまがタドとなるように、仏心と凡心が二つのまんま一つ、一つのまんま二つにとろけて下さるのが信心のすがたである。

一、親心と子心

この仏心が凡心に働きかけて下さるおもむきは、親心と子心になぞらえることが出来る。子は親から生れながら、やがて親を離れて行くが、親の心は子の行く所に何処までも寄り添うて、影の形にそうようにはなれない。やがて機縁が熟して、子がその親の真意に気づく時、親のふところへ還えらされて、そこに子心が誕生する。

陀と同じさとりの世界に導き入れずばおかないという願いはばかりである。それなのにわれらは愚鈍であって、唯目前の欲望満足に走り、猫に小判、豚に真珠のことわざ通り、空しく送り、徒らに暮らしている。

經典に「仏は不請（ふじょう）の友となり給う」とある。われわれは苦海に流転しながらも、あたらし世をほとけになすな花に酒と、性こりもなく煩惱に酔いしれていて、仏を求めず、法を聞こうともしないのに、仏は不請の友、求めようとしないのにあわれんで下さる友となつて、かすずいて下さるのである。

二、今一人のわたし

昨年八十七歳で亡くなったヘレン・ケラー女史は、生後一年七ヶ月で原因不明の脳内病に浸され、目・口・耳の機能が麻痺してしまつた。新聞編集者の父はあらゆる方面に広告して娘の救いを求めたが、それまでに、盲者だけ、又は啞者だけへの特殊教育は試みられていたけれど、ケラー女史のように三重苦の者を引き受けて貰える施設も人もなかった。

幸にもパーキンス研究所から勇敢にも十九歳のアン・サリバンさんが、この困難な仕事を背負うて、家庭教師の大役を申し出た。彼女は、早く病弱の母を失い、父は船乗りで行方不明のため、不具な弟と一緒に孤児院に収容されて

法華経の有名な「長者窮児（ちやうじやくうじ）の譬喩」は、この消息を徹底的に説かれている。親を捨てて長年の放浪のすえ、うらぶれはてた子を、待ちに待った親が見出して、長者の家に導き入れる。しかし子は親の顔さえも忘れはてて、親とも知らず卑屈の泥沼にまみれて、ひがみきつた冷たい心でいるが、その子の故にいろいろのてだてをめぐらしていたわりはげまして育てあげ、やがて父なる長者百歳に及んで親類縁者知己を集め、親子の名告りをあげて一切の財宝を子にゆずると子は慶喜して、

「われ願わざるにかかる財宝をわが身一つに得たり」と、思いもかけぬよろこびを語っている。

仏陀の本意は、一切衆生の煩惱具足の身を見抜かれて、御自身に得られた一切の智慧と功德をあたえ、煩惱の濁水を智慧の潮に一味とし、罪障の水を功德の水と転じて、仏

いたが、弟の死後、ある篤志家にたすけられて、盲・啞者の研究所で学ぶことが出来た。そうした時、三重苦の娘を持つ父親の切々とした訴えを知り、すすんで教師となり、身も心も捧げて、ケラー女史を暗黒と無声の中から抜け出さすことができた。その後女史はラドクリフ・カレッジを卒業し、身体障害者の教育と援助に専念し、世界の二十五カ国以上を講演して回り、日本へも三度訪れ、私も昭和十二年に名古屋公会堂でお話を聞くことが出来た。

さて、このケラー女史は、サリバンさんが教師として来た日を「本当の誕生日」としていたし、常に「わたしの先生」と呼んでいた。またいつもの述懐には

「盲で聾で啞のわたしには外からの教師は無用である。三重苦の私になくてはならぬのは、今一人のわたしである」

と語っている。外からの教師とは、自分の外側にあつていろいろと指導してくれる人であるが、そうした人はその人の教を実行出来ないし、手のほどこしようがないと捨て去る。そうした人々では自分は救われたいと述べ、今一人の私とは、ヘレンさん目が見えないのか、じゃあ私があなたの目になりましょう、耳が聞えないのか、じゃあ私があなたの耳になりましょう、口になりましょうと、今一人の私になりきって下さる人がなかったら、永遠に暗やみから

抜け出すことは出来なかったとの、サリバンさんに対する満腔の感謝の声である。

三、智目・行足なき身

ケラー女史は盲・聾・啞者であるが、私共もまた智目（ちもく）なく行足（ぎょうそく）を欠く身である。法然聖人の常の仰せに

「我は烏帽子（えぼし）もきぬ法然房なり、黒白をも知らぬ童子のごとく、是非をも知らぬ無智の者なり云々」とあるのを読んで驚いたが、聖徳太子は十七憲法に

「我よしみすれば彼はあしよし、彼よしみすれば我あしよし。我かならずしも聖にあらず、彼かならずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。是非のことわりいかなぞ能く定むべけんや。云々」

とあり、更に親鸞聖人は、八十八歳の御筆に

よしあしの文字をも知らぬ人はみな

まことのこころなりけるを

よしあしの字知りがおは

おおそらごとのかたちなり

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて

小慈小悲もなければども

名利に人師をこのむなり

と書きとめられている。なお驚くことは、愚禿鈔（ぐと

くしょう）に

「賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」

とある。聖人の仰言る愚とは、みのるほど頭の下がる稲穂かなの反対で、内がからっぽであるから頭の下らぬ、言いかえれば、狂者は病識（ひょうしき）がないように、真の愚者の故に、われかしこしとしか思えぬ底抜けの愚者である、との告白である。これは大変なことを仰言っているので、正しく私共の正体を、わが御身にひきかけてのお知らせである。

聖人方のお言葉を鏡としてわが身をかえりみる時、私共が日常言いならしている善悪は、時代により、場所により、年齢により、性格によって、みなまちまちであり、転変するもの、むなしなもの、仮りなるものと知らされる。また分りきった道としての親切心とか、うそを云わぬとかいう当然のことでさえ、実行するとなれば何時も崩れる。まして絶対にいそを云わぬとか、悪に負けないで同化してしまふ善などは思いもよらぬことである。翼を失った鳥が、大空をあこがれながら、何時までも地上をのたうち廻っている悲惨さである。

四、如来・聖人は今一人の私

であった韋提希夫人が、子阿闍世のために夫君は獄中に飢え自分も亦宮殿深く幽閉せられた時、釈尊があらわれて下さって、

「汝、命知るや否や、阿弥陀仏、ここを去ること遠からず」

とおしえられている。さらに

「諸仏・如来は、これ法界の身なり。一切衆生の心想中（しんそうちゅう）に入りたまえり云々」とある。

如何にも阿弥陀仏が、私共の煩惱熾盛のすみずみまでをかねてしらしめして、私共の業苦をわが苦悩とされて、悲憫される姿を、そこにまぎ／＼と仰ぐことが出来る。

源信僧都は、往生要集の序文に、

「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤たれか帰せざる者あらんや、云々」

と筆を起こされている。言いかえると、弥陀仏は今一人の私で、目も無く、足もない、焼けぼたみたような私共に目になってやろう、足になってやろうと一つ身になって下さるお方であるとの御指南である。

五、如是我聞

以上のようなことを私の生活の上でいろいろと感じはじ

めたのは歎異鈔に親しんだ頃からであった。この書にあらわれて下さる聖人はいつも後向きのお姿で、聖人御自身のことを如来の御前で打ち明けて下さっているのであるが、そのお言葉をくりかえし読ましていただいているうちに、聖人の仰せがそのまま私の言葉とひびいて来るようになって見出された私自身である。私が自分で私だと思っている私は、私の仮りの姿であり、極く表面だけの着物とでも云うものにすぎないことも知らされはじめた。

このように如来聖人は私自身の奥の奥、底の底まで御理解下さると共に、それ故にこそ、私の目となり足となつて、心の闇を破り、願いを満ちたらわけて下さり、成仏への道をひらいて下さるのである。

歎異鈔はいたるところにその趣きを知らせて頂けるのであるが、その二、三を拾って申せば、白黒も見えず、是非善悪を徹底して知り得ぬ盲人の私に、

「聖人の仰せには、善悪の二つ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御心によしと思召すほどに知りとおしたらばこそよきを知りたるにてもあらめ、如来のあしと思召すほどに知りとおしたらばこそあしさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあ

ることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしま
す」

と仰言る。そこに愚痴無智の身もただ念仏のまことの中
に、安慰を頂くのである。

又、絶対善を願ひ、それが得られないでは根本的解決の
道はないのに、それがどうしても実行出来ないで、むなし
く迷いの境界から解脱出来ない、蹇(あしなえ)の私に、
「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなる
ることあるべからざるをわれみたまいて願をおこした
まう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてま
つる悪人もとも往生の正因なり」

と、聖人が御自身のこととして、私共の壽の身を知らせ
て下さり、本願の船はこの者のために成就下さり、乗せて
彼岸に渡して下さるぞとのお勧めである。

更に、生ある限り何人も死をまぬがれ難いのに、その死
も原因があつて死ぬのであるから、これほど当然なこと
はない。だから他人の死は極めて自然のこととして見るけ
れど、近親者はもとより、自分自身の死となると、当然と見
ることが出来ないで、恩愛たちがたく、愛別離苦に沈む身
に、歎異鈔九章の後半は、唯一の力となつて下さる。

「久遠劫より流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ
うまれざる安養の浄土は恋しからず候こと、よくよく煩

古道としての法

比丘達よ、譬えばここに人ありて林の中をさまよひ、フ
ト古人の辿つた古い道を発見し、その道にしたがい、古人
の住んだ古城、園林があり岸に麗わしい蓮池のある古城を
発見したとするがよい。

その時その人は、王または王の大臣に報じて言うのである
——私は林の中をさまよつて古道と、古人の住んだ古
城、美しい園林があり蓮池もあるのを発見した。願わくば
かしこに城邑(まち)をきずかしめ給え、と。

比丘達よ。そこで王または大臣は、そこに城邑を築かせ
たところ、その城邑はさかえ、人あまた集まり来つて、繁
栄をきわめるにいたつた。

比丘達よ、それと同じく、わたしは過去の正覚者(さと
れるひと)たちのたどつた古い道、古径(こけい)を発見
したのである。

南伝蔵經、相應部「城邑」より

悩の興盛に候にこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁つ
きて力なくしておわるとき、彼土へはまいるべきなり。い
そぎまいたりたきこころなきものをことにあわれみたまう
なり。これにつけてこそいよ／＼大悲大願はたのもしく
往生は決定と存じ候え云々」

と。ことにこの九章のはじめに「親鸞もこの不審ありつ
るに、唯円房おなじこころにてありけり」と、仏恩がよろ
こべず、浄土がこいしく思えぬことをうったえた唯円房に
聖人は同座されてのおこたえである。この聖人のみこころ
のまんまが、私にとっては、今一人の私となつて下さる弥
陀仏の智慧と慈悲の姿であると拜する。

なお歎異鈔に出る聖人の御言葉が私の全生命のすみずみ
まで覆つて下さつてあますところがなく、聖人のみ心の中
に私の全体がおさめられると共に、私の心の隅々まで聖人
があらわれて下さることのありがたさに驚喜させられる。

(おわり)

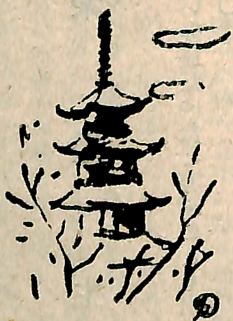


白杵祖山師の法語

孔子は「徳をこれ修めず、学をこれ講(なら)わず、義
を聞いて徒(うつ)ること能わず、不善を改むること能わ
ず、これが憂えなり」と述べていられる。

親鸞聖人は「よろこばず、たのしまず、無慚無愧(むざ
んむぎ)まことのこころなけれども……」と述懐せられて
いる。そこに聖人の深遠高明なる求道の進路がうかがわれ
る。もしもこれに反して、喜んでゐる、快しんでゐる、慚
愧してゐる、まことの心はあるという態度は、決して道を
求める者の心象(しんしやう)ではない。

老師の「自然法爾章」より



聚墨生

罪障功德の体となる、氷と水の如くにて、氷多きに水多し、障り多きに徳多し (和 讀)

世間に二種類の苦勞人がいる。一つは苦勞するごとに磨かれて、苦惱多い人びとのよき理解者、安慰者となる人で、さすが苦勞人だと、世間から親しまれる人である。他は、あの人がひからびて、ひがんだものになったのも、幼いころから冷たい環境で育ち、それから不幸が続いたからだ、人びとから同情されながらも、敬遠されている暗い苦勞人である。

若い頃は、グッスリ眠ると前日の疲れも消えるように、苦勞をこえることも出来るが、中年以後になると苦勞によって心身が傷つくばかりで、いやな暗い思いがしこりとなって心の底の澱(おり)としていつまでも残り、これが段々つもって暗い苦勞人となり勝ちである。

ここに大切なことは、よき教えの太陽を心に持つことである。すると陽光が氷雪をとかすように、心のしこりが自ら消え、そこに再生されているが、現在の日本は大人は自信喪失、若人は暗中模索、そして世界を覆う暗雲の中にある。ここに不滅のよるべを見出して、それを身につけることの大切さをお二人によって教えられる。

ひとの善行を見て随喜する人は、その善行人の人と同じ徳の持ち主である (聖語抄)

ドイツの思想家で作家のリヒテルは「人の喜びをとにもよるこぶことは天使のみができることである」と云っているが、盲人で琴の名師の宮城道雄氏の言葉に「人々がよろこびあう声を聞くと、陰(いん)の音がするし、人々が悲しみ合っている声には陽(よう)の音がする」とあるのを思いあわせる。

それにつけても私どもの胸中に巣食う、ねたみとそねみの心のしつこさ、はげしさにはあきれられるばかりである。こんな心でどうして真実なるもの、純粹なるものを見出し得ようか。文字通り広い海に漂流する盲の亀と同じで、はてしないさまよいがそのさだめである。

ただ、このような身に同化して「君もそうなのか、親鸞もそうなのだ」と寄りそうてくださって「この愚者を救いよとげて下さる方は、弥陀仏の本願ばかりぞ」と教ええられる

然にとかされて、よい経験だったと喜ぶことも出来よう。

聖人の教えはまた時移り俗を易(か)うと雖も、その是非を改む能わず、故に常という。

(聖徳太子、義疏)

聖徳太子は、内に閥族の横暴があり文化は低調、外に三韓の反乱と隋・唐の隆盛、多事多難にして行方も知れぬ時代にあつて、仏陀の教えに導かれて、国境と時代にさえぎられぬ真実の世界への開眼を得られて、ここに国是(こくぜ)を樹立し、内政、外交、文化の各方面に縦横無尽の活動をせられていた。

戦中に戦歌を賛歌をしたことをかえりみて、暗愚であったと慚愧した高村光太郎翁が、昭和二十八年に「美はつぎつぎと移り変わりながら前の美は死なない」と、美の不滅を發見し、再び大いなる確信をもって晩年の芸術作品をはじめている。

ことは、盲の亀の浮木に遇うよろこびである。

それ人間にうまれたること大きなよろこびなり……

その故に本願にあうことをよろこぶべし

(源信僧都・横川法語)

生命とはなんぞやとは、人類開闢(かいびやく)以来の大きななぞで、近代科学の粹をもってしてもいまだに解明されない。しかしわれわれはいま現にこの不思議な生命を遠い昔から受け継いで、人間としてここに生きていることは実に大きな驚きである。

しかし、ただ生命が長いというだけでは尊いとはいわれぬ。人生の行路、山あり谷ありで、時に生をのろうこともありうる。だから生命の尊厳さは、真実なるものを身にうけて、身にもつ障りが如何ようあれ、その障りのあるまま絶えずとかされて、障りが障りとならなくなる時、はじめて感得される。

胃ガンになった青年が、心のよるべを失った時、幸にも篤信の主治医から、歎異抄一冊と「何事もわれ一人のためなりき今日一日のいのち尊し」の色紙をもらい、不思議にも心が転じ、今日一日の生命の尊厳さを自覚し、明日を憂い、昨日を悔やむ心が消えて不治の身になおそそがれる四囲の人々の真情をよろこびうけつつ、短かかったが尊い生涯をまっとうして、彼は本当に幸せであった。

あとがき



彼岸花が咲き、秋の果物が店頭を賑わせております。十月の一道会を前に、池山先生の「絶対他力と体験」を一道会で記念頒布することになりました。

この書は先生が四十二歳の時、歎異鈔をとおして本願に帰入せられてのち、ドイツ語歎異鈔を奥様の追悼出版とせられ、次に御母堂の追悼として意訳歎異鈔を出版せられました。その後この書は大正十年に信仰の懺悔録として書かれたものであります。近角先生は

「君が信仰体験の披瀝である。実にこれ人生をもって紙とし血涙を以て墨とし、骨肉をもって筆として書かれた活文字である……」

と序文で勧めていられます。目次は、
苦惱……(衆生)救済……(如来)

信仰……(仏凡合一) 相続……(信的生活) 獲信の径路……(光明の縁) 流念法海(信後雜感) となつております。実費三百円頒布。京都市左京区山田開町、浄住寺、一道会、に御申込み下さい。

××× ×××

最近、親鸞聖人伝が沢山出版せられました。志のある日本人で聖人をおしたくないものは稀れであります。こうした時、今月は近角先生と柳瀬様とに聖人の真姿を聞かせて頂きました。

又藤本広恵様は私は未見の方であります。求道誌にその懺悔録を克明に書かれていましたので頂きました。ことに求道の上で、大切な点をよくお味わいになっておられますので、私共のよき道標をここに頂きますよう。

「仏凡一体」ということを蓮如上人がよく教えられています。ことをこの稿を書き終る頃に気づき、ことにありがたく思いました。ともしびは、中日新聞の日曜版の「窓」の原稿をすこしあつめて誌しました。

うつるとは月も思わずうつすとは水もおもわぬ広沢の池 (古歌)

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半、一道会例会。

市電、新郊通り二丁目下車、東入ル三筋目左入ル

毎月二十四日、午前午後、昭和区小椋町。教西寺、法話会。

市電、御器所通り下車。市バス、北山町下車、東半丁。

定価 半年 二百五十円 (送共) 一年 五百円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八 編集・発行人 花田 正夫 電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷 印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八 発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番 郵便番号 四五七